

## 《卒業研究報告》

## 大学生の主観的家族観と、それによる家族の定義

—アンケート・インタビュー調査を通して—

加藤 武琉 (本多ゼミ)

## 序章 はじめに

「家族」という単語を聞き、そのような集団についての特徴を思い浮かべたとき、どのようなものを連想するだろうか。具体的にイメージがしやすいよう、三つの国民的なアニメを例に挙げてみる。まずは、サザエさんにおける、サザエさんの家族を見ていく。サザエさん一家は、「夫婦とその三人の子どもがおり、そのうちの一人が結婚した後も実家で同居している」という風に構成されている。つまり、家族の中に二組以上の夫婦が同時に存在していたり、夫婦の親世代が1人でも含まれていると言ったような形式である拡大家族と言える。次にちびまる子ちゃんにおける、まる子ちゃんの家族についてだ。まる子ちゃん一家は、「夫婦とその子家族で同居している」という風に構成されており、これは、夫婦の跡取りの子家族が、その親の家で同居しているといったような家族形式である直系家族と言える。最後にクレヨンしんちゃんにおける、しんちゃんの家族についてだ。しんちゃん一家は、「一組の夫婦とその子ども」という風に構成されている。これは、一組の夫婦と、その子供からなるといったような形式の核家族と言える。また、父がサラリーマンとして、働き、母が専業主婦という形式的にも近代家族的なイメージが強く表れたものとなっている。

ここでは、三つの家族の例を挙げたが、「家族」と聞いて連想したものは、人によってさまざまではないだろうか。そのようにいくつかの家族の類型が存在してはいるものの、それ故に、大多数は

「家族とは」といったことや「家族の定義とは」と問われた時に、家族の定義における確立した社会的な共通認識がなく、それについて明確な答えを出すことは出来ないのではないだろうか。その理由として、各人には、それぞれの家族観があり、家族というものを解釈する際に重要とする要素や条件は、多岐に渡ることが考えられる。それは、誰でも膨大な情報に気軽にアクセスできる情報社会において、様々な考えや価値観に触れる機会が増え、多様化が進んだことによるものだと捉えたい。

それを踏まえ、本論文では若年層の人間がそれぞれ持ち合わせている主観的な家族観に焦点を当て、それを明らかにしていく。また、それと同時に、そのような各々の主観的な家族観を駆使した現代における家族の定義についても、改めて考察していく。

## 第一章 先行研究及び問いの設定、調査概要

## 第一節 先行研究の設定

これまでの家族社会学においても、人々の家族観を測る研究や「家族」の定義付けについては、いろいろなされてきたが、そのような中でキーワードとなるのは「近代家族」だろう。家族社会学では、近代社会における家族は「近代家族」とされており、一組の夫婦とその子どもで一つの単位とするような核家族がベースになっており、1955～1973年の高度経済成長による男は仕事、女は家庭というような性別役割分業の特徴が強く表

れた家族モデルとえば、想像がしやすいのではないだろうか。具体的な家族史的意味での「近代家族」の特徴として、落合恵美子によれば、「①家内領域と公共領域との分離、②家族構成員相互の強い情緒的関係、③子ども中心主義、④男は公共領域・女は家内領域という性別役割分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退とプライバシーの成立、⑦非親族の排除、⑧（核家族）」（落合2019：99）の八つが挙げられるという。また、森岡清美・望月嵩の示す家族の定義として、「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かかわりあい結ばれた、幸福（well-being）追求の集団である」（森岡・望月1997：4）という。

近代家族の定義としては、上記のようなものなど挙げられている。では、「家族」の定義としてはどのようなものが挙げられているのかについては次の通りである。家族社会学における家族自体の定義として、落合がアメリカと日本の代表的な家族社会学の教科書から、家族についての基本仮説・背後仮説を抜き出したものによると、「(a) 家族は人類社会に普遍的に存在する、(b) 家族は歴史や文化差をこえて変わらない本質をもつ、(c) 家族は集団である、(d) 家族は主に親族よりなる、(e) 家族成員は強い情緒的絆で結ばれている、(f) 家族のもっとも基本的な機能は子どもの社会化である、(g) 家族成員は性別により異なる役割をもつ、(h) 家族の基本形は核家族である」（落合2019：100,101）とされている。

また、法の示す家族の定義として、関哲夫（2017-2023）によれば、明治民法においては、「戸主ノ親族ニシテ他家ニ在ル者及ヒ其配偶者」を家族と規定し、「家ニ在ル者」か否かは戸主の戸籍に入っているか否かによって決まったため、家族とは、戸主と同一の戸籍に在る者であった。しかし、現行民法においては、婚姻と親子の規定が置かれているだけで、家族について定めた規定はな

い。特別法においては、家族とは、配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）、父母、子及び兄弟姉妹並びにこれらの者以外の配偶者の父母及び子と規定された例がある（特定秘密の保護に関する法律12条2項1号）としている。

今示してきたように家族の定義のようなものは、いくつか挙げられはするが、現代における家族の定義については、いまだ曖昧なままにある。そのような中、各人の家族観を測る上で、木戸功によれば、「個人は、あるものを家族とみなすとき、あるいはみなさないとき、すなわち家族である/ないの区別をするとき、何らかの知識を行使していると考えられるだろう。この知識に依存して、それに照らして個人は家族について言うことができるのである。個人が有すると類推できるこうした家族にかんする知識をここでは〈知としての家族〉とよぶ。いうまでもなく、この〈知としての家族〉の在り方、行使の仕方は個人によってさまざまである。「主観的」なものであるといってもいいだろう」（木戸1996：3）という。木戸が述べるように、ある対象を家族かどうかを判断する際には、社会的な共通認識の上に成り立つ家族の定義を駆使するのではなく、各人がそれぞれの知識や経験を駆使した「主観的な家族観」によって判断を行っていると言える。

また、「個人の「家族」に関する意識、より厳密にいうならば知識に対して、その個人の言説からアプローチするという戦略を提出したい」（木戸1996：3）というように、木戸の論文は、「主観的な家族観」を明らかにするものではなく、それを測る上での方法論の提示を目的としており、そこまで留まっている。尚且つ、木戸の研究は1996年に執り行われたものであることから、再度、現代の若者の主観的な家族観を測る研究を行う事に意義があると考えられる。

そこで、本論文では、木戸の言う言説における

「家族」の考察と言うアイデアを活用し、主に大学生に焦点を当て、現代の若年層が抱く主観的な家族観を明らかにしたい。また、そのような家族観と並行して各人が抱く家族の定義や、ある対象を家族かどうかを判断する際の重要な項目についても見ていきたい。

## 第二節 問いの設定

仮説として、現代社会では、様々な考え方や価値観が台頭し、多様化が謳われている。しかし、それにより社会で生活するうえでのロールモデルのようなものが失われており、加えてそれぞれの価値観が幅広く許容されたことにより、各人による自分自身だけの家族観というもの確立されていないのではないかと考える。

そこで、本論文では、今までは近代家族的な志向が一般的な中で、今現在の家族意識にはどのような変化が起きているのか、また、現代社会において強い結束を持つ集団として確立している「家族」について、その構成員それぞれが自身以外の構成員に対する家族意識は、どのようなものなのか。そして、そのような意識は如何にして構築されているのかということに着目しながら、個人が対象を家族であるかどうかを判断する際に、何を重要視するのか、どのような定義を持ち合わせているのかについて考察する。

## 第三節 調査概要

### 第一項 調査手法の設定

調査手法として、主に大学生を対象とし、インタビュー調査・アンケート調査を用いる。インタビューについては、18～22歳の大学生5名と社会人1名で男女計6名を対象とし、調査の同意を得た後、8・9月にかけて対面形式で半構造化されたフォーマルインタビューを実施した。許可を得て音声録音し、別日に書き起こしを行った。また、アンケート調査では、7～8月にかけてGoogle

Formを活用し、対象者にアンケートフォームを直接配布した後、アンケート回答結果については、スプレッドシートに起こし、分析を行った。(分析においては、全ての質問項目を取り扱うとは限らない)

### 第二項 インタビュー・アンケート対象者、質問の設定

以下の男女6名にインタビュー調査を行った。

対象者A (男性、19歳、大学生)

対象者B (男性、21歳、大学生)

対象者C (女性、22歳、大学生)

対象者D (男性、21歳、大学生)

対象者E (男性、22歳、専門学生)

対象者F (女性、22歳、社会人)

アンケート対象者における詳細は以下である。

回答者数：50人

男女比：女性44.9%、男性53.1%、非回答2%

学年比：一年生16.3%、二年生46.9%、三年生22.4%、四年生14.3%

また、基本的にインタビュー調査・アンケート調査で共通した質問項目は以下であるが、インタビューにおいては、進行に考慮し、質問内容を変えながら調査を行った。

- ・同居している住人を教えてください。
- ・あなたの家族構成を教えてください。
- ・あなたの思う家族の範囲として、当てはまるものを教えてください。
- ・あなたが重要だと思う家族の定義として、順番に並び替えて下さい。(血縁、同居、愛情)
- ・家族の位置付けや重要性を教えてください。
- ・ある二組の兄弟がいたとする。一組目は、血縁関係にある別々に暮らす兄弟。二組目は、血縁関係のない同じ家に暮らす兄弟。どちらがより

「家族」だと感じるか。

- ・ある二組の家族がいたとする。一組目は、夫婦間で望まずに生まれた子がいる家族。二組目は、夫婦共に望んでの養子がいる家族。どちらがより「家族」だと感じるか。
- ・ある二組の家族がいたとする。一組目は、良好な関係を築いているが、同じ家では暮らしていない家族。二組目は、険悪な関係であるが、同じ家で暮らしている家族。どちらがより「家族」だと感じるか。
- ・ある二組の家族がいたとする。一組は、血縁関係はないが、同じ家で暮らす家族。もう一組は、血縁関係はあるが、全員が別々に暮らす家族。どちらがより「家族」だと感じるか。
- ・ある三組の家族がいたとする。一組目は、両親共働きの家族。二組目は、父親が働いて、母親が専業主婦の家族。三組目は、母親が働いて、父親が専業主夫の家族。どれがより「家族」だと感じるか。
- ・親が反対している同棲中のカップルに子供が産まれました。彼ら3人は家族でしょうか、家族でないでしょうか。あなたはどのように思いますか。
- ・親が反対している同性のカップルが養子を迎え入れました。彼ら3人は家族でしょうか、家族ではないでしょうか。あなたはどのように思いますか。
- ・結婚し、同居しているもののまったく愛情の感じられない夫婦がいます。彼らの間には子供が1人いて、父と子、母と子の関係はうまくいっています。彼ら3人は家族でしょうか、家族でないでしょうか。あなたはどのように思いますか。
- ・夫の両親と同居している夫婦がいました。その後、夫が突然亡くなり、夫の両親と妻だけが残りました。彼らは家族でしょうか。家族ではないでしょうか。あなたは、どう思いますか。
- ・幼い頃に遠くの国に残された孤児と、その後一度もあったことのない日本のどこかにいる両親がいます。彼ら3人は家族でしょうか、家族で

はないでしょうか。あなたはどのように思いますか。

## 第二章 アンケート調査結果

### 第一節 「家族」に対する価値観

まずは、家族に当てはまる範囲についての回答から見ていく。回答の割合として、両親98%、きょうだい94%、祖父母70%、ペット50%、曾祖父母26%、おじ（おば）14%、いとこ12%、はとこ6%という結果になった。全体的に親等が近いほど家族だと思い、反対に親等が離れば家族だと思わないと言ったような傾向が見えた。また、その他の回答として、「同居していて、血縁がなくても生計を共にしており、お互いを大事だと思いつている人」という意見も見られた。

次に、重要な家族の定義（血縁、同居、愛情）の並び替えについてだ。一番目に重要な定義として、「血縁」28票、「愛情」19票、「同居」3票。二番目に重要な定義として、「愛情」20票、「同居」18票、「血縁」12票。三番目に重要な定義として、「同居」27票、「血縁」14票、「愛情」9票という結果が得られた。そこからは、家族の定義における要素として、「血縁」「愛情」「同居」の順で重要視するという傾向が分かる。

基本的にアンケート対象者は、上記の問題で回答したそれぞれの家族の定義における価値観に沿って対象を家族であるかどうか判断する訳である。しかし、状況によって、自身で設定したはずの家族の定義に沿わないケースが見られた。次節以降においては、そのような特徴が見られた問題に注目し、詳しく見ていきたい。

### 第二節 「家族」の比較による家族観

ここからの質問項目においては、全て問題形式で構成されている。木戸の論文での調査手法を参考に、「個人の意図的、意識的なそうした主観的家族観の行使の仕方を観察するために、操作的に問題状況を設定し、それに対する個人の反応を検

証するという方法」(木戸 1996:4)をとり、本論文の調査でも活用していく。

また、具体的な問題自体の意図としては、問題ごとに「同居」「血縁」「愛情」の三つの中で作為的にどれか一つの要素を排除し、二つの要素の比較を行わせ、各対象者の家族の定義を再確認していくことを目的としている。それを踏まえたくて、前項での内容に引き続き、「自身で設定したはずの家族の定義に沿わないケース」について見ていく。

はじめに、「ある二組の家族がいたとする。一組目は、夫婦間で望まずに生まれた子がいる家族。二組目は、夫婦共に望んでの養子がいる家族。どちらがより「家族」だと感じるか。」という問題に関してだ。ここでは、「血縁」と「愛情」の比較を行うために、作為的に「同居」の要素を排除している。そして、回答の結果は次の通りである。一組目(「血縁」の要素を持つ組)と回答したのは22%、二組目(「愛情」の要素を持つ組)と回答したのは78%である。アンケート対象者の家族の定義における重要度の傾向によれば、「血縁」があることを最も重視しており、「血縁」のある一組目の方が回答率が高いはずである。しかし、回答率としては、22%であり、反対に夫婦ともに望んでの養子という「愛情」の要素がある二組目の回答率が、78%と一組目を大きく上回る結果となった。また、一組目と回答した人の理由としては、「望まずとも血縁関係がある以上、家族だと考えたため」などの意見が挙げられ、二組目と回答した人の理由としては、「夫婦が子供を家族だと認識して大切にしているから」「家族という集団のあるべき姿であるから」などの意見が挙げられている。

次に、「ある二組の家族がいたとする。一組は、血縁関係はないが、同じ家で暮らす家族。もう一組は、血縁関係はあるが、全員がバラバラに暮らす家族。どちらがより「家族」だと感じるか。」

という問題に関してだ。ここでは、「同居」と「血縁」の比較を行うために、作為的に「愛情」の要素を排除している。回答の結果は次の通りである。一組目(「同居」の要素を持つ組)と回答したのは56%、二組目(「血縁」の要素を持つ組)と回答したのは44%である。先ほども触れたように、アンケート対象者の家族の定義における重要度の傾向によれば、「血縁」があることを最も重視しており、次に「愛情」、最後に「同居」という順番で並んでいる。その結果に倣うならば、「血縁」のある二組目に回答が集中するはずだが、「同居」のある一組目の方が回答率を上回る結果となった。また、一組目と回答した人の理由としては、「同じ屋根の下にいることは、自分のプライベートを互いに晒すことになるから」「血縁関係はあまり関係ないと思うから」などの意見が挙げられ、二組目と回答した人の理由としては、「どんな形であってもどこで暮らしていても血縁関係があれば家族だから」「血がつながっているのがいろんな意味でちゃんと家族」などの意見が挙げられている。

最後に、「ある二組の兄弟がいたとする。一組目は、血縁関係にある別々に暮らす兄弟。二組目は、血縁関係のない同じ家に暮らす兄弟。どちらがより「家族」だと感じるか。」という問題に関してだ。ここでは、「血縁」と「同居」の比較を行うために、作為的に「愛情」の要素を排除している。結果は次の通りである。一組目(「血縁」の要素を持つ組)と回答したのは70%、二組目(「同居」の要素を持つ組)と回答したのは30%である。この問題の内訳として、シチュエーションは違えど、一つ前に紹介した問題と構成が同様なものになっている。しかし、一つ前の問題では、「同居」の要素を持つ組の回答率が高かったが、今回は、「血縁」の要素を持つ組に回答が集まり、アンケート対象者の家族の定義における重要な要素の並べ替えの傾向には沿った結果ではあるが、シチュ

ーションの変化によって回答に大きく違いが現れた。また、一組目と回答した人の理由としては、「離れて暮らしているから家族と感じないという訳では無い」「血がつながっていることが家族といえる最低条件かなと思う」などの意見が挙げられ、二組目と回答した人の理由としては、「血縁関係のみが家族である証明ではないから」「同じ時間を過ごす方が家族らしいから」などの意見が挙げられた。

自身で設定したはずの家族の定義の並べ替えから大きく外れる結果の例が挙げたという事は、「血縁」「同居」「愛情」以外にも、問題から本来その要素が持つ意味以外にも何らかの要素を読み取り、足りない情報を自己で補完しているのではないかと考える。また、そうであるならば、対象を家族かどうかを判断する際における重要な価値観が他にも存在している事を示唆しているのではないだろうか。

### 第三節 「家族」の判定における価値観

木戸によれば「話者による状況規定は、問題状況解決のためのひとつの手段であり、対象の家族である/ないの判断のひとつの根拠となりえるものである。換言すれば、話者は、それが「どうすれば」、あるいは「どうであるならば」家族であるのか、ないのかということ判断しているのである。そして、話者がそれを家族とみなしている場合、話者が規定する状況は、話者が考えるところの、その対象が家族であるためのいくつかの条件を示していると考えられるものである」（木戸 1996：5）としている。つまり、状況規定はそれを設定した人における重要な価値観と言ってもいいだろうと考える。それを踏まえ、本節においては、状況規定に注目して分析に入っていく。

はじめに、「親が反対している同棲中のカップルに子供が生まれました。彼ら3人は家族でしょうか、家族でないでしょうか。あなたはどう思い

ますか。」という問題に関してだ。この問題において意図的に設定された問題状況は、「親の反対がある」ということだ。また、判明している家族の定義における要素としては、「血縁」のみであり、「同居」「愛情」については不透明である。結果は次の通りである。「家族である」と回答したのは92%、「家族ではない」と回答したのは8%である。そして、「家族である」と回答した人の理由としては、「カップルが子供を望んでいたのなら家族だと思う」「本人たちの意思はわからないし、親の意思だけで家族かどうか決まるわけではない」などの意見が挙げられ、「家族ではない」と回答した人の理由としては、「結婚していないため」などの意見が挙げられた。また、家族であるとした人の回答の理由に、「本人たちが望んでいたのなら」というような意見が挙げられており、これは、木戸のいう状況規定に該当する。そこからは、対象を家族かどうかを判断する際における新たな項目として「当事者の意思」という要素を見出すことができ、新たな視点での考察に繋がるのではないだろうかと考える。

次に「結婚し、同居しているもののまったく愛情の感じられない夫婦がいます。彼らの中には子供が1人いて、父と子、母と子の関係はうまくいっています。彼ら3人は家族でしょうか、家族でないでしょうか。あなたはどう思いますか。」という問題に関してだ。この問題において意図的に設定された問題状況は、「夫婦間に愛情がない」ということだ。また、判明している家族の定義における要素としては、「同居」「血縁」があるが、問題状況に倣い「愛情」はないものとしている。結果は次の通りである。「家族である」と回答したのは86%、「家族ではない」と回答したのは14%である。「家族である」と回答した人の理由としては、「一緒に住めるならば家族としてもいいと思う」「子どもを媒介した家族だと思う」などの意見が挙げられており、「家族ではない」と回答

した人の理由としては、「夫婦の仲が悪いのなら家族ではないと思う」「子どもを、家族関係を繋ぎとめる道具に使わないでほしいと思いました」などの意見が挙げられた。ここでも、「一緒に住めるならば」「夫婦仲が悪いのであれば」と言った状況規定により、「同居」や「愛情」が家族の定義における重要な一角として成り立っている事が再確認できたのではないだろうか。そして、子どもの存在を重要視するような回答も見られたため、家族の判定において、子どもがもたらす影響や家族内における立ち位置などについては、インタビュー結果の方でも詳しく見ていきたい。

最後に、「夫の両親と同居している夫婦がいました。その後、夫が突然亡くなり、夫の両親と妻だけが残りました。彼ら3人は家族でしょうか。家族ではないでしょうか。あなたは、どう思いますか。」という問題に関してだ。この問題において意図的に設定された問題状況は、「血縁」がないということである。他に、判明している要素は「同居」だけであり、「愛情」の有無については不透明である。結果は次の通りだ。「家族である」と回答したのは72%、「家族ではない」と回答したのは28%である。「家族である」と回答した人の理由としては、「どちらかでも家族だと思うなら」「信頼関係があり、愛があるなら家族だと思います」などの意見が挙げられており、「家族ではない」と回答した人の理由としては、「血縁関係が無いから」などの意見が挙げられた。アンケート対象者の「血縁」を重要視するような回答も見られつつも、ここでも先ほども登場した「家族だと思っているなら」というような「当事者の意思」を尊重するような状況規定が挙げられている。そのようなことから、対象を家族かどうかを判断する際の定義において、「当事者の意思」という要素を重要な家族定義の一つの要素として仮定できるのではないかと考え、「家族」における子どもの立ち位置についてと並行して、インタビュー結

果のパートで具体的な語りを見つつより深く分析・考察を進めたい。

### 第三章 インタビュー調査結果

#### 第一節 語りから見る「家族」に対する価値観

本章からは、アンケートでも出題した問題と同様なものに対して、インタビュー結果から具体的な語りを見つつ分析を行っていく(問題の意図は、アンケート調査と同様である)。また、対象者との対話の流れによって質問や進行に違いがあるため、問題への回答において、インタビュー対象者全員の回答を用いらない場合もある。

そして、重要だと思う家族の定義(血縁、愛情、同居)の並び替えに關しての回答として、次の結果が得られた。対象者Aは、「血縁」「同居」「愛情」の順だと回答。対象者Bは、はじめに「血縁」「愛情」「同居」の順と答えたが、対話の中で回答に変化があり、後に「愛情」「血縁」「同居」と回答した。対象者C、対象者D、対象者Eは、「同居」「愛情」「血縁」の順であるとしたが、対象者Eは、後に「愛情」が最も重要であり「同居」と「血縁」が並んでいると回答した。対象者Fは、「愛情」「血縁」「同居」の順だということ。

#### 第二節 語りから見る「家族」の比較による家族観

##### 第一項 「血縁」と「同居」の比較

「ある二組の兄弟がいたとする。一組目は、血縁関係にある別々に暮らす兄弟。二組目は、血縁関係のない同じ家に暮らす兄弟。どちらがより「家族」だと感じるか。」という問題に対して以下の回答が得られた。

A: 血縁関係がある別々に暮らす兄弟じゃない? 家族って言うのは血の繋がりがだと思ってるから。

B: 別々に暮らしてる血の繋がった兄弟かな。

C: 血は繋がってるけど別々に暮らしてる方も。本当に仲が良くて同居してるんだっから血は繋がってなくても家族だなんて思うけどさ、凄く仲悪いのにただ一緒に暮らしてるだけなら家族とは思えない。

D: 物心付かない時から一緒に住んでるなら、血が繋がってなくてもそっちの方が大事だなんて思うけど、10歳以降から突然現れた人といきなり一緒に住んで、10歳まで一緒に住んで別れた血縁のある人がいたら、血縁関係のある方を兄弟って思うかな。

E: 期間にもよるけど、血縁関係は確かに大事だけど、例え血が繋がってなくても長い間一緒に暮らしてたら血が繋がってるとも思えるし、兄弟って思える。だから、血縁関係がなくても長い間一緒に暮らしてるなら血が繋がってない方の兄弟かな。

F: 自分がってなったら、別々に住んでいる兄弟だけど、第三者の人の環境を見ると、一緒に住んでる方も。

結果としては、対象者A、対象者B、対象者Cは一組目と回答、対象者E、対象者Fは二組目と回答、対象者Dは、状況によって回答に変化があるとしている。まずは、対象者Cの回答について見ていきたい。以前の回答から対象者Cの考える家族の重要な定義として、一番目に「同居」を重要とし、三番目に「血縁」を重要視していることが分かるが、今回の回答では、それが大きく矛盾している。自身で設定した家族の定義に則るならば、「血縁」の要素を持つ一組目ではなく、「同居」の要素を持つ二組目をより家族だと思いと回答するはずである。そのような回答になった理由について、対象者Cは、血縁がなくても「良好な関係で同居しているなら」家族であり、「険悪な関係で同居しているなら」家族ではない、という状況規定をしている。それらの情報から考察するに、

一組目は「血縁」という揺るがない要素を持っているが、二組目は「同居」という状況によっては消えてしまう不確定な要素のみになっていることから、「愛情」の有無が判明していない状況において、揺るがない要素を持っている一組目をより家族だと思いと回答したのだと考えられる。

そして、次に対象者Dについてだ。対象者Dは、「幼いころから同居しているなら」二組目、そうではないなら一組目をより家族と思うというような状況規定が見られた。そして、似たような語りとして、対象者Eの「血縁がなくても長期間同居しているなら」家族と思えるという状況規定が見られた。そして、二人の状況規定に共通しているのは「過ごした期間」という要素が挙げられる。「過ごした期間」に比例する家族の定義として、「愛情」が挙げられることから、対象者C、対象者D、対象者Eの三名は「愛情」という要素の濃さや有無で対象を家族かどうか判断を行っており、「愛情」以外の定義のみでは家族の判断を容易に行えないことが考えられるのではないだろうか。

## 第二項 「血縁」と「愛情」の比較

「ある二組の家族がいたとする。一組は、夫婦間で望まずに生まれた子がいる家族。もう一組は、夫婦共に望んでの養子がいる家族。どちらがより「家族」だと感じるか。」という問題に対しては以下の回答が得られた。

A: 一問目と一緒にでしょ。(血縁関係がある方を家族だと思う)

B: 養子かな。一組目も家族ではあると思うんですけど、望まれない形で生まれたから。

C: 血が繋がってる方かな。やっぱり家族って言われると血が繋がっているものっていう印象が強い。でも、血が繋がってなくても家族ってなる。だって、実際両親は血が繋がってない訳じゃん。



D：二組目の養子に迎え入れた方が家族だと思ってる。さっき重要性の三つの並べ替えのやつあったじゃん？この場合は、同居はどっちもあるし、その次に来るのは愛情だから、どっちが愛情があるかって言われたら養子に来た子の方が望まずに生まれた子より愛情を持って育てられると思うから、血縁関係より愛情が大事ってことで二組目の方が家族だと思う。

E：二組目かな。理由としては、愛情が大事だと思ってる、望まずに生まれた子って言うのは、両親との関係が上手くいなくて家出しちゃったりとかも聞いたことがあって、だから望まずに生まれた子がいる家族は、養子の家族と比べたらちゃんとした家族って言えないのかなって思う。

F：養子。これは親の気持ち的な問題。

結果としては、対象者A、対象者Cは一組目と回答、対象者B、対象者D、対象者E、対象者Fは二組目と回答した。ここでは、対象者C、対象者Eの語りに注目したい。対象者Cは「家族と言われると血縁があるものという印象が強いが、血縁がなくても家族だと思える」といったような発言をしており、対象者Eは「愛情のない一組目は、愛情のある二組目と比べた際、ちゃんとした家族と言えない」としている。ここでの2名の発言には主観的な視点での家族観と、客観的な視点での家族観が強く表れていると考察する。対象者Cの場合には、「家族は血縁があるものという印象が強い」という、「家族」に対しての「印象」という抽象的なイメージを語っているが、その後の「血縁がなくても家族って思える」という発言では、「思える」と言い切りながら具体的な例を挙げている。前者の回答は、イメージや印象などで語っている事から客観的（社会的）な視点での家族観であり、後者の回答は、具体的な例を挙げな

がらの明確な価値観が現れていることから主観的な視点での家族観と言えるのではないだろうか。そのことから対象者Cは、客観的な家族観としては、表面的に見た際に分かりやすい「血縁」などの要素を重要視し、主観的な家族観としては、表面的には分かりにくい「愛情」などを重要視する近代家族的な価値観を所有しているのではないかと考える。

また、対象者Eについては、愛情が重要であるという前提のもと「望まずに生まれた子がいる家族は、養子の家族と比べたらちゃんとした家族って言えない」としている。そのことから、対象者Eの愛情のない家族は「ちゃんとした家族」ではないとするような主観的な家族観が見えたのではないだろうか。

### 第三項 「愛情」と「同居」の比較

「ある二組の家族がいたとする。一組は、良好な関係を築いているが、同じ家では暮らしていない家族。もう一組は、険悪な関係であるが、同じ家で暮らしている家族。どちらがより「家族」だと感じるか。」という問題に対して、以下の回答が得られた。

A：同じ場所に住んでる人たちじゃない？家族って同じ家に住んでるもんなんじゃないの。

B：良好な家族かな。

C：別々に暮らす家族じゃない？

D：一組目で、別々に暮らしてても良好な関係を持ってると言うのが理由ですね。そっちの方が家族って言われてイメージが着くし、俺だったらもし親と険悪な関係やムードがあつたら縁を切ってもいいなっくらい思っちゃうから一組目の方が家族かなって思う。険悪だけと一緒に住んでいるって言うのは仕方ないって言うか、むしろ一人

で暮らせる能力があるなら別々に暮らして  
ると思うんだよね。だから、それは同居で  
あり、同居じゃないと思う。

E：良好な関係だけど、離れて暮らす一組目だ  
と思ってる。理由としては、俺も中学の時  
とか反抗期の時があって両親のことウザい  
なって思ってた、そういう時に家出て行き  
たいとか関わりたくないなって思ってたか  
ら。そういう状況になると、家族ではある  
けど、家族だと思えないって感じになっ  
たから一組目かな。

F：一組目。

結果としては、対象者B、対象者C、対象者D、  
対象者E、対象者Fが一組目と回答、対象者Aは  
二組目と回答した。まずは、対象者Dの語りから  
見ていきたい。対象者Dの状況規定として、「両  
親と険悪な関係なら縁を切ってもいい」として  
おり、そこからは、「愛情がないのなら家族では  
ない」というような主観的な家族観が伺える。  
また、「険悪な関係での同居は不可抗力であり、  
一人で生活できる能力のあるならば同居はし  
ていないはず」としていることから、「同居」と  
いう要素に対し、表面的な「共に暮らして  
いる」という情報のみを読み取っているの  
ではなく、「同居」における背景や当事者の  
心情を想像して発話を行っていることが  
分かる。そこからは、各対象者は家族の  
定義における「血縁」「愛情」「同居」の  
それぞれの要素に対し、自分自身で何  
らかの情報を補完して本来のその要素が  
持つ表面的な情報のみには留まらない  
別の情報を読みとっているとも言える  
のではないだろうか。

次に、対象者Eの語りについてだ。対象者Eは  
自身が反抗期の際、両親との関係が上手  
いかずにいた時があり、そのような状況  
下においては「家族だけど、家族とは思  
えなかった」というような発言をして  
いる。ここでいう「家族だけど、家族

とは思えなかった」という発言は、客  
観的（社会的）な視点で見ると血縁関  
係があり同居もしていることも踏ま  
えて家族と言えるが、主観的な視点  
で見ると、そこに「愛情」はなく、家  
族とは思えなかったという意味合いを  
汲み取ることができるのではないだ  
ろうか。また、そうなる対象者Eは、  
対象者Dと同じように「愛情がないの  
ら家族ではない」という主観的な家族  
観を所有していると考えられるので  
ないだろうか。

しかし、そのような「愛情」を重要と  
するような価値観の対象者がいる一  
方、当初から「血縁」のみを最重要  
視する対象者Aのような確立した家  
族観をもった人もいるため、一概に  
「愛情」を最も重要だとは言えない  
だろう。

#### 第四項 「同居」と「血縁」の比較

「ある二組の家族がいたとする。一組は、  
血縁関係はないが、同じ家で暮らす家  
族。もう一組は、血縁関係はあるが、  
全員が別々に暮らす家族。どちらが  
より「家族」だと感じるか。」とい  
う問題に対して以下の回答が得られ  
た。

A：二つ目の方かな。生物的にも家  
族って言うのは血の繋がりがあ  
るものだと思うから。

B：血縁関係がある方かな。

C：どちらも家族っぽいかな。でも、  
同じ家じゃない？だって、今私  
が彼氏と結婚して旦那になると  
するじゃん。そしたらそれは家  
族でしょ？それこそ、一緒に暮  
らしてなかったら家族ではない  
気がする。血縁関係がないの  
に別々に暮らしてたら家族じゃ  
ないけど、血縁関係がない人と  
一緒に住んで、家族になろうと  
してるならそれは家族。

D：一緒に住んでいる家族かな。でも  
結構僅差かなと思ってて、やっ  
ぱさっき言った同居、愛情、血  
縁とか考えたときに同居も愛  
情もあるからこそ、何か愛情  
を持って家族

として暮らしてるんだなと思うから、結構そっちの方が僅差で家族だなと思う。仲悪いとしたら、どっちも家族じゃないと思うな。

E：一組目だと思う。その理由は、やっぱり、自分が子供だったとしても一緒に住んで、やっぱり何かしてもらって嬉しいこととかがあったら、そう言うことから相手側の愛情を感じられて、やっぱりそっちの方が長続きするし、一番家族って思える。

F：客観的に見ると一組目。主観的に見ると二組目。

結果としては、対象者C、対象者D、対象者E、対象者Fは一組目と回答、対象者A、対象者Bは二組目と回答した。ここでは、対象者Cの印象的な語りについて見ていく。対象者Cは、「家族になろうとしてるならそれは家族」と発言しており、これは、第二章三節での家族の定義における新たな指標として仮定した「当事者の意思」の尊重に当たらないだろうか。アンケート調査結果の分析の際には有力な要素として仮定してそこまで留めていたが、インタビュー対象者の語りの中で、家族の判定として確かに「当事者の意思」を尊重するような価値観が行使されたため、以降は「当事者の意思」を新たな家族の定義の要素として解釈し、それを考慮して分析を行っていく。

そして、次に、対象者Dの語りについて見ていく。ここでは、対象者Dは、「仲悪いとしたら、どっちも家族じゃない」という状況規定を行っており、そこからは、以前の対象者Dの語りの中で考察した「愛情がないのであれば家族ではない」という価値観を確定付けることができるのではないだろうか。

次に、対象者Eの語りについてだ。対象者Eは、同居し、愛情を感じられる環境を「一番家族だと思える」としており、そこからは、対象者Eの考

える理想の「家族」を構成する要素として、少なくとも「同居」「愛情」のどちらかが必要だと言えるのではないだろうか。また、対象者Eは、重要な家族の定義として、「愛情」を最も重要だとしていることから、対象者Eの理想の「家族」を構成する要素として「愛情」は、「家族」を構成する重要な一要素と断定することができるのではないかと考える。

#### 第五項 「性別役割分業意識」による比較

「ある三組の家族がいたとする。一組目は、両親共働きの家族。二組目は、父親が働いて、母親が専業主婦の家族。三組目は、母親が働いて、父親が専業主夫の家族。どれがより「家族」だと感じるか。」という問題に対しては以下の回答が得られた。

A：父親だけが、働いている方でしょ。家に母親がいた方が理想的だし、普通は女の人が家の仕事とかするじゃん？家族っぽいなって思うのは母親が家にいる方じゃない？

B：まず消去法として、母親が働いている家族は、一番ぼくない。後は、どっちだろう。同じくらいだな。でも、どちらかと言えば父親が働いている方かな。

C：どれでも一緒だけど、専業主婦とか言ったら昔の人間とか思われそうだけど、それが一番ドラマっぽいから専業主婦。

D：両親共働きのの方が家族だなと思ってる。自分自身そうだし、自分も実際に家族を持つ時にそっちの方がいいなと思ってる。自分が子供のときは、別に夜はお母さんもお父さんも家にいたし、寂しいなって感じたことは1回もなくて、逆にずっと働いてたこそからこそお金はあるなと思ってて、今大学もちゃんと行かせてもらって20歳までの面でみたら結構全然愛されてんなとは

思ってる。だからこそ、そっちの方が長期的な愛はあるんじゃないかなと思ってます。

E: 理想だし、家族っぽいと思うのは、父親が働いて、母親が専業主婦だと思ってる。その理由としては、母親がいつも家にいる家族の方が子どもに愛情が注がれてる気がするから。なんかイメージになっちゃうんだけど、やっぱり小さい子って母親好きの子が多い感じがして、お母さんは優しくして、父親が叱る見たいなイメージがあって、そういうところから躰も成り立ってると思ってる。

F: 共働きじゃない? 共働きの人って、なんか子どもの将来的なことを考えてる感じがする。共働きしてる分、家事育児とかは、お互い分担して両立するのが一番理想じゃない?

結果としては、対象者D、対象者Fは一組目と回答、対象者A、対象者B、対象者C、対象者Eは二組目と回答した。それぞれの回答の理由として、自身の理想を語る対象者や、消去法での選択を行う対象者も見られたが、全体としては、対象者自身の家庭のスタイルに影響を受けているような傾向がある印象を受けた。また、「男が仕事、女が家庭」という性質の二組目に回答が集中しており、そこからは、一般的な近代家族のスタイルを理想とする人が多いことが分かり、現代の若年層においても近代的家族思考は淘汰されていないと考えられる。

次に、家族内におけるそれぞれの理想の「愛情」に関与するような具体的な語りについて見ていきたい。対象者Dは、共働き家庭は、両親のどちらかが常に家にいるという状況はなくなるが、両親で働くことで経済的な余裕が生まれ、そのおかげで今も大学で教育を受けることが出来ていると

し、そのようなことから共働き家庭には「長期的な愛情」があるとしている。対象者Fも似たような回答をしており、経済面で考えても「子どもの将来的なことを考えてる感じがする」とし、そのような発言からして対象者Dの言う「長期的な愛情」のようなものを感じ取っている事が分かる。それに対し、対象者Eは、母親が専業主婦の家族の方が子どもに愛情が注がれていると考えるとしており、その理由として、子どもに対し、母親は優しく接し、父親が叱るというようなイメージがあり、「そういうところから躰も成り立ってると思ってる」としている。対象者D、対象者Fは経済面に絡んだ「愛情」を主張するのに対し、対象者Eは、家庭内での教育に絡んだ「愛情」を主張している。そのようなことから一括りに「愛情」と言っても、その感じ方や、何を「愛情」とするかについては多岐に渡ることが考えられるだろう。

### 第三節 語りから見る「家族」の判定における価値観

#### 第一項 「親の反対がある」という問題状況

「親が反対している同棲しているカップルに子供が産まれました。彼ら3人は家族でしょうか、家族でないでしょうか。あなたはどのように思いますか。」という問題に対して、以下の回答が得られた。

A: 家族でしょ。

B: まあ家族ではある。

C: それは家族でしょう。

D: 家族ですね。それはもう子供ができた時点で、自分、父親、母親の家族より、自分、奥さん子供の家族の方が大きくなると思うからそっちの家族だなんて思います。

E: 家族だと思うかな。やっぱ父親母親の意見もめっちゃ大事だと思ってるんだけど、一番重要なのは、付き合ってるそのカップル

の人たちの意見だと思って、親が反対して別れるって言われても、そのカップルの人たちは絶対別れないと思う。3人の中での愛情もあると思うから。

F：でも反対してるぐらいだから、それは家族だよ。

結果としては、対象者A、対象者B、対象者C、対象者D、対象者E、対象者Fの全員が「家族である」と回答した。その回答理由としては、「子どもができた時点で自分の両親よりも妻子の存在の方が家族として大きくなるから」などの意見が挙げられたが、注目したいのは、対象者Eの「一番重要なのは、付き合ってるそのカップルの人たちの意見」という発言である。ここでも以前から挙げられている「当事者の意思」を尊重するような語りが現れた。初めて対象者全員の回答が一致した今回の問題において、その理由を考察するに、考えられることとしては、対象を家族かどうかを判断する何らかの要素が一致したことが一つの要因なのではないだろうか。また、その要素としては、以前からも度々挙げられている「当事者の意思」を有力なものとして考えたい。

## 第二項 「親の反対がある」「同性」という問題状況

「親が反対している同性のカップルが養子を迎え入れました。彼ら3人は家族でしょうか、家族ではないでしょうか。あなたはどのように思いますか。」という問題に対して、以下の回答が得られた。

B：まあ別に家族かな。本人たちが家族って言ってるんなら俺は家族だと思ってる。

C：家族でしょう。その人たちが家族って思っれば家族かな。別々に暮らしてたとしたら、正直家族なのかなって思っちゃう。ずっと一緒に暮らしてて仕事の関係で途中から

別々に暮らしたりなら分かるけど、初っ端から一緒に暮らしていない家族ってなんなのかなって思う。

D：家族。

E：家族。本人たちには愛情もあるからね。

F：家族。養子も迎えてるんだよね？そしたら家族だよ。

結果としては、ここでも対象者B、対象者C、対象者D、対象者E、対象者Fの全員が「家族である」と回答した。まずは、対象者Fの回答から見ていく。対象者Fは、「同居していない場合には」という状況規定のもと婚姻届けを出していないことも相まって家族ではないとしている。そこから分かることとしては、対象者Fの中では「子ども」の有無を大変重要視しているが、「血縁」「同居」「愛情」の要素のどれかさえあれば家族が成立するような考え方ではないということが読み解ける。また、そのような考え方は、その他の対象者にも当てはまることも大いに考えられるため、次章ではそれも踏まえて考察を行いたい。

そして、次に対象者B、対象者Cの回答についてだ。対象者Bは「本人たちが家族って言ってるんなら俺は家族だと思ってる」と言い、対象者Cは「その人たちが家族って思っれば家族かな」という風に語っている。一つ前の問題での対象者Eの価値観に続き、対象者B、対象者Cも「当事者の意思」を尊重する価値観のみに依った考え方で対象を家族かどうかの判断を下し切っていることから、改めて、家族の定義を踏まえた家族判定において、「当事者の意思」という要素の重要性が伺えたのではないだろうか。

## 第三項 「血縁関係はない」という問題状況

「結婚し、同居しているもののまったく愛情の感じられない夫婦がいます。彼らの間には子供が1人いて、父と子、母と子の関係はうまくいって

います。彼ら3人は家族でしょうか、家族でないでしょうか。あなたはどう思いますか。」という問題に対して、以下の回答が得られた。

- A：家族と言えば家族だけど、あんまりいい家族とは言えないでしょ。
- B：家族です。
- C：(両親の)仲は良くないけど子どもはいるってことだよ。そしたら何があっても家族だよ。
- D：それは家族じゃないと思う。子と父親、子と母は、それぞれ家族だと思うけど、両親の間に愛情がないから3人が家族かで見るとは家族じゃないと思う。
- E：自分の家族も似たパターンで、親と子で見方も変わってくるんだけど、子としては、家族だと思う。でも、夫婦間の関係で見ると家族じゃないと思う。
- F：子供に接する対応に影響なきゃいいんじゃない。

結果としては、対象者A、対象者B、対象者C、対象者Fは「家族である」と回答、対象者D、対象者Eは「家族ではない」と回答した。まず、注目したいのは、対象者Cと対象者Fの「子ども」に関連する語りについてだ。対象者Cは、子どもがいるのならば「築き上げてきたもの」があり、離婚しない限り、何があっても家族なのだという。その回答の理由として、「築き上げてきたもの」という発言から考察すると、子どもを出産し、育児をしていくプロセスのことを総称しているのではないかと考える。夫婦間で協力して子どもを育てる中で、自動的に「同居」「愛情」という要素や自身の中での理想の夫婦の関係性のようなものを汲み取り、加えて子どもが生まれたことにより、両親の間にもその子を媒介した疑似的な血縁関係のようなものが生まれる事から、子どもの有無を

重要なものとして解釈し、それらの流れを総括して「築き上げてきたもの」として表現しているのではないかと考える。

続いて、対象者Fについてだ。対象者Fは、「子供に接する対応に影響なきゃいいんじゃない」と語っているが、その理由としては、家族内において、夫婦間の関係よりも親子間の関係の方が重要なのだという。それは、原体験として、両親が自分の事を一番に考えていてくれていたからこそ、自然とそのような考え方になっていったと言う。三組の家族を例にした性別役割分業意識を測る質問においても、それぞれのインタビュー対象者の回答が当事者の家庭内の環境に左右されていた傾向があるように、主観的な家族観の形成には各人の家庭内環境による影響も関係しているといえないだろうか考える。

#### 第四項 「夫婦に愛情がない」という問題状況

「夫の両親と同居している夫婦がいました。その後、夫が突然亡くなり、夫の両親と妻だけが残りました。彼ら3人は家族でしょうか。家族ではないでしょうか。あなたは、どう思いますか。」という問題に対して、以下の回答が得られた。

- A：家族じゃない？子供を通して妻と祖父母には血の繋がりがあから。
- B：同居してるんだよね。関係が良好なら、そしたら家族だと思いますね。
- C：家族だけど、家族ではないよね。仲にもよるけどさ、実家に戻っちゃうよね。(子どもがいるなら家族である)
- D：俺は、仲が良いなら家族だし、仲が悪いなら家族ではないと思う。
- E：家族。その理由は、両親でも夫でも亡くなったときに流す涙は同じだどどと思ってる。それは、友人が亡くなった時の涙とは別なものな気がしてるから、そこは家族かなと

思う。

F：家族。でも客観的に見てもそれは家族かなと思う別々に暮らしたとしても。

結果としては、対象者A、対象者B、対象者E、対象者Fは「家族である」と回答、対象者Cは「家族ではない」と回答し、対象者Dについては、「愛情」の有無で回答に変化があるとしている。対象者B、対象者C、対象者Dの三名は、「愛情」に関する状況規定などを行いながら対象を家族かを判断しており、ここでも家族の定義における「愛情」の重要性の再確認が出来たのではないだろうか。

そして、次に、対象者Cの語りについてだ。対象者Cは「家族だけど、家族ではないよね」と発言しており、これは以前の対象者Eの「家族だけど、家族とは思えなかった」という発言と同様である。対象者Eのこの発言に関しては、客観的（社会的）な視点で見ると家族と見做せるだけの条件がそろっているが、主観的な価値観で見ると何らかの家族の定義における要素の不足が足枷となって、家族ではないと考えているのではないかと考察した。そのような考察を対象者Cの発言にも当てはめて考えたい。また、「子どもがいる場合には家族」という状況規定もしていることから、今回の問題の状況においては、対象者Cの「子ども」の有無を重要視する主観的な家族観が現れていたのではないかと考える。

#### 第五項 「血縁はあるが一度も会ったことがない」という問題状況

「幼い頃に遠くの国に残された孤児と、その後一度もあったことのない日本のどこかにいる両親がいます。彼ら3人は家族でしょうか、家族ではないでしょうか。あなたはどのように思いますか。」という問題に対して、以下の回答が得られた。

A：血の繋がりがあがるから家族でしょ。

B：両親の気持ちを知りたいな。子どもを一人のままにしていっているのか、家族として迎え入れたいのか。

C：まあ家族じゃない？血が繋がってるってことが家族になるんだったらこれも家族だよ。家族っぽいって言われたら血縁は要らないと思う。だけど、家族かって言われたら血縁は大事だと思う。外から見た時に仲が良くて同じ家に住んでることが家族っぽいって思うけど、ちゃんとした家族って言われると血縁が大事に思える。

E：家族じゃないね。

F：家族。家族が何人いてもいいし、血が繋がってる以上家族だから。血が繋がってたらそれはもうもちろん家族で、繋がってない状態で家族か家族じゃないかっていう判断するのは、もうその人たちの心情と環境にあると思う。

結果としては、対象者A、対象者C、対象者Fは「家族である」と回答、対象者Eは「家族ではない」と回答し、対象者Bについては、明確な回答が得られなかった。まずは、対象者Cの語りから見ていく。対象者Cは、「家族っぽいか」と言われたら「血縁」はいらぬが「家族か」と言われたら「血縁」は重要であるのだという。外から見たときに「同居」「愛情」があることが「家族っぽい」と思うが、「ちゃんとした家族」には「血縁」が大切としている。そのような発話から対象者Cや対象者Eの言う「ちゃんとした家族」は、「血縁」などの覆らない要素による客観的（社会的）な家族観として所有しており、「家族っぽい」は「同居」「愛情」などによる近代家族的な志向による主観的な家族観として所有していると言えるのではないだろうか。

もう一つ注目したいのは、対象者Bと対象者Fの語りについてだ。対象者Bは、今回の問題にお

いて明確な回答が出せなかったが、「両親の気持ちを知りたい」としており、その発言から読み解くに、両親が孤児のことを「家族だと思っているなら」彼らを家族と見做し、「家族だと思っていないなら」彼らを家族と見做さないというような状況規定を行おうとしていたのではないだろうか。そうならば、ここでも「当事者の意思」という要素だけを軸に対象を家族かどうかを判断していることとなり、家族の判定における「当事者の意思」という要素の信頼度は極めて高いと言えるのではないだろうか。また、対象者Fも「血縁」のない状態において、対象を家族かどうかを判断する際には、「その人たちの心情と環境にあると思う」としている。対象者Bに続き、対象者Fの主観的な家族観としても家族の判定において、「当事者の意思」によって家族かどうか決定されるのではないかと考える。

#### 第四章 考察

以上のアンケート調査・インタビュー調査の結果から以下のような考察ができるのではないだろうか。

全体を通して、アンケート・インタビュー対象者による「同居をしているなら家族」「仲がいいなら家族」などと言ったような状況規定を見てきた。家族の定義の比較を測る問題などでは、問題別で「血縁」と「同居」の比較を測るものや、「同居」と「愛情」の比較を測るものなど、その内容はさまざまであったが、どの問題においても家族の定義における要素を駆使した状況規定が度々行われており、対象を家族かどうかを判断する際には、「血縁」「愛情」「同居」などの要素を交えて判断を行っている印象を受けた。そこから言えることとして、「血縁」「同居」「愛情」といった要素はそれぞれが独立的に位置しているのではなく、人はそれらを複合的に考え、その具合によって家族の判断を行っていると言えるのではないかと

と考察する。

次に、インタビュー対象者の「主観的家族観」と「客観的家族観」が顕著に表れていた発話についてだ。「家族だけど、家族じゃない」「家族っぽい」「ちゃんとした家族」といった語りとして、「家族っぽいか」と言われたら「血縁」はいらないが、「家族か」と言われたら「血縁」は重要であり、外から見たときに「同居」「愛情」があることが「家族っぽい」という発話を基に、対象者の言ういわゆる「ちゃんとした家族」は、「血縁」などの覆らない要素による客観的（社会的）な家族観として所有しており、「家族っぽい」は「同居」や、「愛情」をベースとした家族構成員同士の尊重し合う関係が押し出された近代家族的な志向による主観的な家族観として所有しているのではないだろうかと考察し、それにより、「家族」というものに関する価値観においては、対象者たちは「主観的家族観」と「客観的家族観」をそれぞれ持ち合わせ、状況別でそれらの価値観を駆使していることが分かったのではないだろうか。

また、本論文の趣旨は若年層の「主観的な家族観」に焦点を当てるため、「客観的な家族観」については深く分析・考察は行わないが、主に大学生を対象とした若年層の「主観的な家族観」としては、調査結果の分析から印象の強い2つの要素が挙げられた。

一つ目としては、「愛情」の要素だ。「愛情があるなら家族」「仲が良いのだとしたら家族」などをはじめとし、状況規定だけで見ても「愛情」を軸にしたものが最も多く、それはつまり対象を家族かどうか判断する際には、「愛情」の要素の有無によって家族の判断に大きく変化があると捉えられるのではないだろうか。それを考慮するならば対象者の主観的な家族観として、家族の判定においては「愛情」は必要不可欠だと考察できる。二つ目は、「当事者の意思」という要素だ。「家族かどうかを判断するのはその人たちの心情と環境



にあると思う」「本人たちの気持ちが大切」などの「当事者の意思」を尊重した家族観が挙げられていた。また、そのような要素を主観的な家族観として重要なものなのではないかと考察する理由としては、「血縁」「愛情」「同居」の3つ要素の複合的な家族判定とは別に、当事者たちが家族だと自覚しているならば家族であると判断しきっている回答がいくつか挙げられていたためである。

そして、今挙げた二つの要素を掛け合わせて読み解いていきたい。細かく見ていくとそれぞれの価値観が伺えるのはもちろんだが、全体の傾向として、今回の大学生を対象とした若年層の主観的な家族観という意味においては、「愛情がないのであれば家族ではない」という意味合いで「愛情」を「家族」の必要条件的に捉え、「当事者による家族の自覚さえあれば家族である」という意味合いで「当事者の家族としての自覚」を「家族」の十分条件的に捉えているのではないかと考える。

また、対象者が「当事者の意思」を尊重する傾向が高いことについて述べたが、これは、各人による個人個人の意識の比重が増していると考えることが可能である。それについて、山田昌弘によれば、家族に関して、「複数の選択肢」が存在し、様々な家族のあり方を自由に選択できるという観点から、家族を分析するにおいて、『「規範」に縛られない個人、つまり、複数の規範が選択肢として提示され、どの規範に従うかを選択することができる「個人」の存在を前提にする』（山田2004：3）という。「当事者の意思」を尊重する対象者たちは、山田のいう「規範」に縛られない「個人」に当てはまり、若年層の主観的な家族観の一要素として「個人化」を捉えることも出来たのではないだろうか。それらを通し、人は対象を家族かどうかを判断する際、「家族」をただの枠組みとしてだけでは捉えなくなったのではないとも考える。「陰悪な関係の夫婦とその子どもの3人は家族かどうか」という質問に対して、ある対象者は

「子と両親それぞれは家族であるが、3人が家族かで見たら家族ではない」という旨の発話を行っていた。やはり、そこからは、「家族」をただの枠組みとして捉えていないことが分かるだろう。

加えて、各人によるさまざまな価値観が存在している原因としては、「家族」という言葉がより深く世間に浸透し、広まっていくことで抽象的な意味合いで捉えられるようになっていったことによるものだとも考える。だからこそ「家族っぽい」や「ちゃんとした家族」などの抽象的な表現が語りに現れていたのではないだろうか。森岡らによれば、「家族員相互の関係を「家族関係」といい、かつて同一家族の成員であった人びと相互の関係を「家族的関係」という」（森岡・望月1997：9）としているが、そんな中で、「家族関係」と「家族的関係」が混同した故に社会における共通認識としての「家族」を見失い、各々で独自に「家族」を解釈しており、そのような独自の解釈も「主観的な家族観」を形成する一部分となっていると考える。

また、「当事者の意思」という要素と似たような立ち位置の要素として「子ども」の存在の有無によって、対象を家族かどうかを判断するような場面も幾度か見られたが、それも「家族関係」と「家族的関係」の混同によるものだと考える。対象者の中で「子ども」が生まれることで「家族関係」を強く意識し、今までの「家族関係」にあった人びとが「家族的関係」になることから、「子ども」という要素を駆使した家族の判定が見られたのではないか。つまり、対象者の指すところの「家族」は「家族関係」を意味しているのではないかととも考察する。終章

結論として、若年層の主観的な家族観としては、前章で述べた通り、対象を家族かどうかを判断するにおいて、「愛情」を必要条件とし、「当事者の意思」を十分条件としたが、最後に仮説との対応について見ていく。仮説では、現代社会は、様々

な考え方や価値観が台頭し多様化が進んでいき、それぞれの価値観が台頭したことによって家族観が確立していないことを挙げていた。しかし、それとは反対に、多様化によって様々な価値観や考え方を許容する体制が出来上がっており、それ故に「当事者の意思」といったような本人たちを尊重した家族の定義が出来上がっていると言えるのではないだろうか。

今回の調査では、以上のことが明らかになったが、そのような結果は今現在の社会におけるものであり、時間が経てば変化してしまうものである。時代の流れによって家族観が大きく変化することも考えられるため、一定の周期で同様の調査を行っていく必要があるだろう。また、今回の調査では「主観的家族観」にのみ焦点を当てて調査を行ってきたが、「客観的家族観」にも着目し、その二つの比較を行うことで、より質の高い考察を行うことが可能となり、若年層の「主観的家族観」の核心に近づけるのではないだろうか。

#### 参考文献

- (1) 落合恵美子、2019、『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた』、有斐閣。
- (2) 木戸功、1996、「それは家族であるのか、家族ではないのか、ではどうすれば家族であるのか-「家族」とその状況規定-」、『家族問題研究学会』、21 (3)、p.2~13。
- (3) 関哲夫、2017-2023、「【家族・親族】用語集」、図解六法、(2023. 11.23 アクセス、<https://www.zukairoppo.com/glossary-kazoku>)。
- (4) 永田夏来・松本洋人、『入門家族社会学』、新泉社、2019。
- (5) 森岡清美・望月嵩、1997、『新しい家族社会学 4訂版』、培風館。
- (6) 山田昌弘、2004、「家族の個人化」、『社会学評論』、54 (4)、p.341-354。